

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0470200544		
法人名	医療法人 社団 仁明会		
事業所名	グループホーム青葉	ユニット名	
所在地	宮城県石巻市門脇字一番谷地57番地の19		
自己評価作成日	平成 23年 10月 25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム青葉は医療法人が経営母体であり、併設の介護老人保健施設の医師・看護師により日常の健康管理はもちろん、急変・異常の際も迅速に対応できるよう医療連携体制を確保しております。現在は震災の影響で控えていますが、ホームでの行事・活動に力を入れ、併設施設や地域との交流・行事参加も多彩です。『年を重ねるごとにより自分らしく、笑顔を絶やさず楽しく健康に暮らしたい』をスローガンに掲げ、ゆったり穏やかに一人ひとりのペースで過ごせるよう取り組んでいます。職員は楽しみを持って利用者の皆様と関わっており、職員・利用者の皆様共に明るく笑顔と笑い声の絶えない日々を送っています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://yell.hello-net.info/kouhyou/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成23年11月11日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

石巻河南インターから南に車で5分ほどのところ、医療法人・仁明会が運営する「第二恵仁ホーム」(介護老人保健施設)と「訪問看護ステーション青葉」の同敷地内に「グループホーム青葉」がある。この事業所との連携で、防災や医療など入居者の安全・安心のサポートをしている。東日本大震災ではホームの家屋は無事だったものの、職員の6割が大きな被災を被り物心両面で難儀な状態にあった。近所付き合いや外出などについては地域全体が被災しており、従前どおりの取り組みが難しい状況であった。しかし、入居者と笑顔で接し、前と変わらぬケアに努め、家族の相談にも応じるなど頑張っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 グループホーム 青葉)「ユニット名」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念とは別に利用者様と考案したスローガンを掲げている。又、職員間で理念に基づいた年間目標を話し合い、理念を共有・実践できるよう努めている。	今年度の目標は、全職員が各々提案書を持ち寄って話し合い作成された。スローガンとしている「より自分らしく、笑顔を絶やさず、楽しく健康に」の実践として、職員は震災を感じさせないケアに全力を注いだ。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入している。地域の行事に参加させていただいたり、ホーム主催の行事への参加、お手伝いの協力を得ている。	震災後は慰問者との交流が多かった。地域の落ち着きと共に町内会婦人部の「お茶会」に参加したり、ゲートボール場に出掛けて世間話をしたりしている。年末・年始のホーム主催行事に住民を招待する予定でいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の中学校の職場体験学習やボランティア等を受け入れ、認知症の方々への理解を深めていただけるよう努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回意見やアドバイスをいただきサービスの向上に繋げている。地域行事等において、委員のはからいから交流の幅が広がっている。	震災前は2ヶ月に一度の開催ができていた。前回2月の外部調査で公表済みである。その後、震災の影響が大きく開催の復帰が難しかった。この外部評価の結果報告にあわせて、早速会議を開催したいとしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市主催の研修・講習会に参加したり、指導・助言をいただけるよう担当者に働きかけている。	市からの情報提供等は電子メールで送られてくる。震災時は市職員が来訪し、状況の確認やオムツの補充をしてくれた。市の実施指導では地域への積極的参加を促された。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修に参加し勉強会に取り入れている。マニュアルを作成し理解意識を高め、身体拘束の無いケアを心掛けている。	「行動の自由を奪うこと、嫌がることはしない」を基本にし、入居者との対話では「否定をしない」ことを意識している。外に関心を示す様子が見られるような時は活動に誘って気分を変えたり、家族への連絡を約束するなど本人が納得できるよう対応している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修に参加し勉強会に取り入れている。普段、何気ないことが虐待に繋がっているといた気づきもあり、虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	本人・御家族と話し合い、本人・御家族・裁判所職員との連携に努めた事がある。勉強会・研修にて理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	その都度納得できるよう説明し、疑問点等を伺っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者様・御家族の意見は十分時間を設けて伺うように努めている。家族会の際には遠慮なく不満や悩み、要望等を話して下さるようお願いし、意見等をケアの向上に活かせるよう努めている。	被災した家族の悩みを聞き、法人と連携して対応した。家族アンケートには「よく話を聞いてくれ、丁寧に対応してくれる」「変わらぬ職員の明るさに感謝」との記述があり、入居者だけでなく家族への配慮もうかがえる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日の申し送りや職員会議時に。又、随時意見や提案を聞いている。	職員会議や申し送りノートの記録を見ると様々な提案がされている。職員の休憩時間を交代で確保することや、職員用の加湿器設置など、職員は自由に発言することが出来ており、ホームの運営に活かされている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働きやすいよう職場環境を整え、向上心を持って働けるよう配慮している。法人独自の考課制度にて実績や成果の反映を図っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修に参加している。又、事業所独自で勉強会を定期的に開催している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修先で同業者との交流・情報交換の機会がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	時間を十分用いてご本人の訴えに耳を傾け理解を深められるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	不安・悩み・要望等、利用者様には席を外していただいた上で、時間を十分用いて伺うよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	グループホーム利用がふさわしいのでは・・・といった方の申し込みが殆どである為、他のサービス利用は検討したことはない。関係者・御家族・ご本人との相談も含め、必要に応じた対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に生活する上で利用者様に学ばせていただくことも多い。職員は楽しんで利用者様と関わっており、協力関係を築く努力をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	報告し話し合い、できるだけ協力を得られるよう働きかけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	御家族の協力を得たり、訪問の際にいつでも遊びに来てくださるようお願いするなど、友人と接したり馴染みの場所に出かけたりする機会を持続できるよう努めている。	家族は、少なくとも月に一度は面会に来て話している。自宅へ行っても「帰りたい」(ホームへ)と言うなど、ホームが馴染みの場所であり、居心地良い場所になっているようだ。訪問美容室の美容師も馴染みになっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	役割や活動を通じて良好な関係を築けているが、一部で確執が見られ、職員が間に入りフォローしたり孤独にならぬよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	法人系列のケアマネや他施設を紹介したり、再度申し込みいただき再入所される等、関係を断ち切らないよう配慮している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	コミュニケーションを図りながら、希望・意向の把握に努めている。失語症の方には十分時間を用いてジェスチャーや選択肢を活用し把握に努めている。	新しい入居者には寄り添って、本人の立ちや生き方を話題にして話を聞くなど、1対1の空間を大切に信頼関係を築いている。それらの情報が、会話が困難になったときに「思いを推察」することに役立っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用前にバックグラウンドについて十分伺い、御家族・知人の面会等や毎日の会話の中で少しでも把握できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一般状態の観察・申し送り・各記録の確認等にて把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員間で定期的に話し合いの場を設け、本人・御家族の意向をふまえたうえでプランに反映している。	毎月、計画の評価を実施、6ヶ月毎と随時の計画見直しをしている。退院後の入居者の車椅子使用や和布団への変更、食欲不振の対応などが細かく話し合われているのが記録で分かる。家族への説明・同意もある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	計画と記録の連動性を識別できるよう、記録を工夫している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人・御家族の状況や要望等に沿った柔軟な対応に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物等に地域資源を利用している他、消防署立会いのもと防災訓練をしたり、学生の職場体験学習の受け入れを行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には協力医療機関への受診となり病院側からの理解も得られている。それ以外の病院受診の際は、本人・御家族の意向に沿った病院を受診できるよう配慮している。	協力医療機関がかかりつけ医である。医師が日常の様子を見に来るなど良好な連携ができています。看護師の訪問があり、発熱時など状態変化時には、受診判断の相談をする。「健康記録チェック表」に記録する。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設施設の医師・看護師により健康チェックや相談・指導をしていただいております。緊急時も迅速に協力を得られる体制となっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院関係者・御家族との情報交換・連携を密に行い、入退院がスムーズに行なわれるよう努めている。入院の際は他利用者様と定期的に面会に訪れ、不安を払拭できるよう配慮している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の対応に係る指針を定め御家族に説明・同意を得ている。併設施設の医師・看護師長・事務長も含め、職員間で方針を共有している。	入居時に交わす契約書の中に「看取り介護の指針」の項がある。これにより家族の同意を得ている。他に「重度化した場合の対応に係わる指針」がある。具体的事象が生じた場合は、家族の希望を聞き、取り組んでいくとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急法の研修を受講し、勉強会に取り入れマニュアルの見直しを行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回消防署立ち会いのもと、併設施設と総合防災訓練を実施。他に地震・火災想定自主防災訓練を実施し、地域の協力を得られるよう運営推進会議メンバーにも参加していただいた。	2月の地震想定訓練後に頭を保護する、慌てて逃げる必要は無い、行動の優先順位を付けるなどを確認しあっていた。震災の際には、それが役に立った。今後の訓練では目的意識をもって取り組みたいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	他者の目から配慮し、さりげなく声掛け・対応するよう心掛けている。プライバシー保護について勉強会や研修にて接遇の向上に努めている。	食事や就寝、入浴など入居者の生活ペースを尊重しながら、オムツの交換時などは羞恥心に配慮し、プライバシーの確保に努めている。化粧水をつけて鏡を見て生き生きするなど、その人らしく暮らせるように支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その都度意向を伺い対応している。自己決定できない方には、幾つかの選択肢を用いたり助言する等工夫し、できる限り自己決定できるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その都度やりたいこと等伺っている。その人のペースに沿った対応を心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人のこだわりや希望に沿って対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	その人の能力に応じて準備・片付けを共に行っている。必ず職員が各テーブルに付き一緒に食事を摂り、献立は食べたい物を伺いメニューに取り入れている。	職員が作成した献立を栄養士が助言している。果物(柿や梨)や鮭など旬の食材で季節を楽しみ、入居者の好きな刺身などで食卓を楽しんでいる。食後に入居者がテーブルを拭きながら談笑しているのが微笑ましい。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	併設施設の管理栄養士にバランス・カロリーをチェックしていただいている。一人ひとりの能力に応じた食事形態・水分量の確保を心がけ、チェック表にて摂取量・体重の増減を把握している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	その都度声掛け・セッティング・必要に応じて介助し清潔を保てるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	チェック表を用いて一人ひとりの排泄パターンの把握に努め、その人に沿った声掛け・誘導を心掛けている。	チェック表により個別誘導の時間を把握し、トイレでの排泄に向け支援している。車椅子では複数職員での介助、オムツの交換もトイレで行なうなど自立を促す支援を行なっている。オムツからリハビリパンツになった例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	運動を主体とした活動を取り入れ、水分量の確保と食物繊維や乳製品を多く含む食物の提供を心がけ、必要に応じて下剤等にて調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者様の要望に応じて職員間で話し合いながら臨機応変に対応している。勤務形態により夜間の入浴支援はできていないが、夜間の希望は聞かれていない。	入居者の希望は「一番風呂に入りたい」「〇〇さんと入りたい」などあり、対応している。車椅子利用者の負担を軽くするシャワーチェアの使用もある。浴槽から流れてくる入居者の歌声は、聞くほうも気持ちが良い。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その人のペースや希望に合わせ、各々の好む場所で休息できるよう配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬表をマーカーを用いてファイリングし、職員一人ひとりが薬の目的・副作用・用法・用量について正確に把握できるよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	バックグラウンドや趣味・特技等の楽しみをもとに、その人に合った好む活動や役割を働きかけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望を伺い、御家族の協力を得ながら外出支援している。又、全体での外出や外食の機会を作り、楽しみを見い出せるよう努めている。	震災前は、月に一度は行っていた「気晴らし観光」は、その後まったく実施していない。家族の協力で毎月帰宅していた入居者は、自宅が流され外出も無くなった。最近ようやく散歩と町内会婦人部のお茶会に、歩ける入居者だけが出た。外食もしていない。	被災した職員が、ケアに精一杯努めていることに頭が下がる。外出することは、その人らしい暮らしや意欲、自立を保つためにも大切なことと理解して、屋内だけで過ごさずに戸外でも過ごせるよう工夫していただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	預かり分とは別に、その人によって自由にお金を所持して頂いている。買物の際は能力に応じて支払ができるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話・手紙は自由であり携帯電話を所持している方もいる。その都度本人・御家族の希望に応じて支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活感を出せるよう、家庭的な品々の設置や季節に応じた装飾・花類に利用者様と一緒に取り組んでいる。温湿度や臭い、光加減等配慮している。	食堂(リビング)と談話室(畳敷き)に囲まれてオープンキッチンがある。談話室は演芸の舞台となる広さだ。加湿器を置き、冷暖房はボイラーにより24度を目安に集中管理している。食堂ではトランプ等の活動を楽しみ、壁には入居者の作品(習字)が貼ってある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂・談話室・玄関等、それぞれが自分の場所を確保し、自由にくつろいでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していた馴染みの品々を持参していただき、その人の個性に合った空間確保に努めているが、物があることで不安になる方には安心して過ごせるよう、本人・御家族と話し合い配慮している。	目標達成計画の「和室段差の安全確保」については、居室の上がり口付近にある洗面灯が人の動きを感知して自動点灯する仕組みになっていることから、それを頼りに職員は死角となる居室の見守りができる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	必要な場所に手すりを設置している。より自立した生活を送れるよう手すりを2箇所増設している。		